特集

まちづくり型観光振興

中　岡　紀　子（内子町総務課　内子町総合観光センター）

1．まちづくり型観光振興とは

内子の目指すべき観光地のあり方は，「まちづくり型観光地」である。この一文は，内子の「光」を「観」なおそうー内子町観光振興計画書―（発行内子町　編集地域総合計画研究所昭和59（1984）年9月発行）の第1部行動計画，「Ⅰ内子の選択」の冒頭に掲載されている。それによれば「まちづくり型観光」とは，土地の個性を体現している小さな資源や可能性をキラリと光らせるような観光地を目指すことが適切であり，歴史的，文化的香りのする環境，特色のある物産や伝統的技術，新しい地域づくりの活動の試み，人々を惹きつける魅力をもつことという解釈である。

昭和57（1982）年に八日市護国の伝統的建造物群保存地区（以下「町並保存地区」という。）が，国の重要伝統的建造物群保存地区の選定を受け，本格的な建物保存のための修理，修景が開始されて間もなくこの計画書ができたのである。内子町にとって未だ観光という概念がなかったとき，一般市民にとり，松山市の道後温泉や松山城への遊山が観光であると広く捉えられていた時代に，内子町の観光振興の方向性を決定づけたバイブル的存在である。

町並保存事業は，建物とその他の工作物などを統括的に含む，すなわち歴史的な環境を面的に保全して文化を伝えていく場としての使命を与えられたが，観光資源としても光を当てて交流人口を生みだして経済を起こし，地域振興のモデルにしようとしたのである。

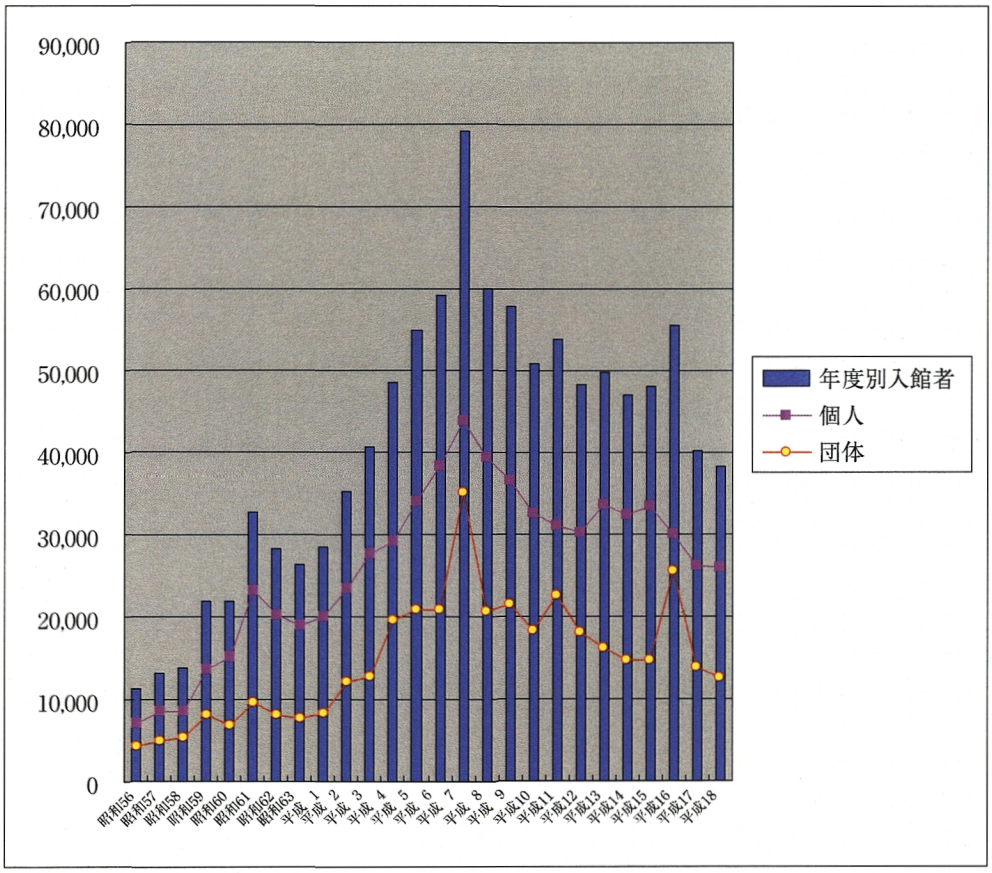
町並保存地区の環境を伝統的な景観を保ちながら住環境として心地よく整え，その景観美と日常的に暮らす人々の佇まいの心地よさに共感を覚える人のみ訪れてもらいたい。その旨の意志を表明して，観光交流人口の増加を目指した。

また，町並保存地区は，単なる建物の保存のみを施している地区では無い。この土地の歴史と文化を再認識して，物語を伝承させていくことも併せて早くから取り組まれた。国の重要伝統的建造物群保存地区として選定を受ける前から「木蝋とは，なんぞや」という問いに答える施設を開館させた。

その施設が，木蝋資料館上芳我邸である。昭和55（1980）年に仮オープンして昭和56（1981）年4月1日正式に開館した。木蝋生産と海外輸出で財を成した上芳我邸の豪商邸内を公開するとともに，原材料のハゼノキの実の収穫から常温で固形の油脂に加工する方法，また木蝋生産の歴史などを紹介した。さらに，施設の学芸的な活動の奥行きを広げるため，木蝋生産に関す

る民具資料1,444点が平成３年，国の重要有形民俗文化財として指定された。さらに，それらを紹介するための拠点施設として木蝋資料館上芳我邸内に木造建築物を多く手がけていた吉田桂二氏による設計により，平成６年度木蝋資料展示棟及び木蝋資料の収蔵庫が整備された。

歴史的，文化的香りのする環境を１つ１つ吟味しながら作り出していった１つである。歴史的，文化的な香りを体験する拠点整備は，保存して町民が活用するという内子スタイルとして，今後花ひらくのである。



木蝋資料館上芳我邸入館者推移　歴史的，文化的香りのする最初の拠点の人気バロメータ

２．内子スタイル

歴史的，文化的香りのする環境は，町並保存地区以外にもその波を広げた。大正５（1916）年，木造の芝居小屋「内子座」の復原工事とその後の活用に，内子らしさ，内子スタイルをみることができる。

町並保存地区の選定を受けた昭和57（1982）年，内子座は老朽化のために取り壊され駐車場となるところを八日市護国町並保存地区の選定を契機に，「保存して活用する」という方針の

もとに取り壊しにストップがかかった。同年6月2日実測調査が行われ，建物の価値が確認された。翌昭和58（1983）年，愛媛県文化の里「木蝋と白壁の町並」として八日市護国を含む本町筋を地区指定された。これにより，内子座の修理復原工事費の1/2が愛媛県予算として支出されることへの根拠ができたのである。

国の町並保存地区選定後，愛媛県の理解により文化の里を整備する予算まで交渉の結果取得することができ，7,020万円の1/2は，愛媛県から支出することになる。

昭和58年10月14日木工事入札から昭和60年10月5日のこけら落としまで，3年間をかけて復原工事が行われ創建当時の姿が蘇った。内子座は，敷地1009.91平方㍍，建築面積642.15平方㍍，1階は594.42平方㍍，2階は254.54平方㍍，客席数は650席。時代の変遷とともに幾重にも塗り重ねられた改修工事の中，それを丁寧にはぎ取り創建当時の姿を探し当て，部材を取り替えたり，補修したりして往時の姿を取り戻した。

喜んだのは，往時の姿を知る町民，また幼い時のかすかに残る内子座の思い出のある町民である。こけら落としの前に，町長の諮問機関的な位置づけで，「内子座のあり方，使い方を考える住民委員会」が町民14名で結成され，内子座の未来についてその姿を探った。

その結果，①内子座を町民のホールとして，②文化的希求を満たす場として使う。例えば質の高い興行を打つ。トップアーティストを招く。大学の演劇発表の場，または合宿，講演会，コンサートを開き，内子座から豊かな文化的機運を醸し出す。観光の資源として，内子座を観光の目玉とするのであれば，駐車場を整備するとともに町並保存地区と内子座をつなぐ観光順路，駐車場を整備し，町内を歩かせる順路を紹介して市街地周遊を目指す，などが提言された。

この提言を受け入れ，運営方針としては当時画期的な取り決めとなった。

○「町民が自分たちの文化財であるという自覚を持つとともに，町民自らの文化活動を展開する場として，積極的な活動を図る」

○「町内のみならず一流レベルのイベントを催し，町の文化レベルの底上げを図るよう活動に務める」

積極的な興行機能と興行の無い時は，内子座場内を見学できるようにした。ふたつの使い方である。これによって，日常的に人のいる劇場空間となった。

さらに，内子座が復活することによって，町民に大きな動きが生まれた。

演劇の好きな町民による素人劇団「オーガンス」が結成されて，地元の演劇熱を高めている。また，一流の芸能に触れてみたいという町民により自主興行団体となる「蔵漆会」や「内子座社中ふれだいこ」，「内子おたまじゃくしの会」などが結成された。

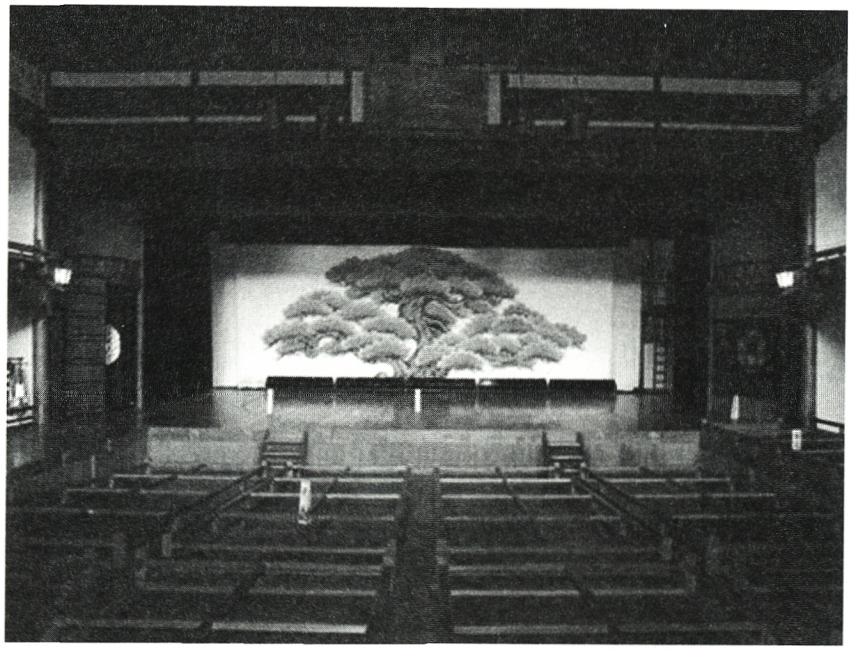
この興行活動の結果，宇野重吉一座，上原まりの越前琵琶公演，渡辺美佐子の一人芝居「化粧」，松山政路のミュージカル「山彦ものがたり」，八名信夫の芝居「エーおせんにキャラメル」などの実績が次々にうまれた。

このほかにも，中村富十郎，坂東玉三郎などの歌舞伎公演，また人間国宝の技芸人を迎えた

文楽公演，桂米朝の落語など伝統芸能の上演も盛んとなり，一流の芸能にふれることができた。内子座の舞台で繰り広げられる上演は，駐車場にされるよりも遙かに濃密な人間交流交差点となり，幾多の感動をもたらした。

歴史的，文化的な香りのまちづくりの原点となる器「内子座」を使いこなすのは，内子町民の心意気であり，町民による町民のための文化活動こそが内子スタイルである。

内子座は，平成10（1998）年ごろから自主興行主となる町民グループの活動が次第に低調となり，興行が減っている。質の高い興行が繰り返し行われることにより，内子座は劇場としての本来の役目に息を吹き返す。今後の若手への取り組み継承が鍵となる。



復原された内子座。ここで幾多の上演がなされて感動が生まれたのだ。

3．健康になるためのグランドデザイン

平成17年１月１日内子町，五十崎町，小田町との合併後，内子町観光協会，五十崎観光協会，小田観光協会も平成18年２月28日に合併し内子町観光協会（以下，「協会」。）となった。合併後，協会の事業展開の指針としてバイブルを持とうと「内子町観光交流計画書」を策定した。同計画書を策定する前に協会主催で地域おこし研修会を開催した。約１年をかけて内子，五十崎，小田の現在の観光資源の研修をするとともに，今後の方向性を話し合った。

同計画書の総括は「地域文化の薫るまちづくり」である。具体的なイメージは，まちづくり型観光地を継承し，さらに内子町の歴史的，文化的価値を認め，内子町でそれを学習し，地域の人々との交流を願う観光客が滞在し交流する観光地を目指すという姿勢である。生活文化や

歴史，風土を味わい，豊かな精神世界に触れひいては日本の「心」の所在が体感できるようなまちづくりである。

健康になるためのグランドデザインは，「歩く」という人間の最も基本的な移動手段を主なテーマにしている。その機会をより多く設けて，観光資源を体感すること，そして次へ移動する事そのものも喜びになる体験を創出することである。地域やテーマを違えればより多くのコースメニューができよう。それを「街あるき」「里あるき」「川あるき」「山あるき」の4つのテーマに絞り，提案している。

「街あるき」は，美しい景観を残すこと，その景観に身を置き美しい環境を楽しむ。また，楽しい喫茶店や小さなレストランを設けて，歩いた時の休憩拠点として，または情報を入手する際の拠点施設となってもらう。さらに，町並保存地区でみることのできる小さな路地や水路の佇まいも視点が向くよう，景観の細部を発掘する視座ができるよう，さりげない紹介に務める。

また，景観を阻害することはできないが，伝統的でなおかつ文化的香りのする建物には，適切な建物紹介などを付帯して，知的興奮，関心をひきおこすよう「街あるき」に伴う小さな発見に感動をもたせるよう工夫する。

「里あるき」は，やはり農山村を巡り歩くこと。市街地の町家は，商家であるため路に沿って連続して建ち並ぶ。これに対して農家は中山間地にあり，1個の農家が生産のための道具収納や食品加工，風呂など機能別棟による家屋群を建てて個性的な空間を形成している。また，鏝絵などの造形も町家と異なり，違った居住環境を作り出している。それらを巡るのもまた，楽しいコース創出となる。

最後には，変則的に位置する農家のある集約の拠点を設ける。つまり，不特定多数の方が訪れても，迎え入れることのできる農家が集落にいくつできるかが，観光交流地区としての鍵となってくる。

基本的な生業が農業であるけれども，それの副業として「農」ある暮らしそのものを楽しむ客観的姿勢。「農」を継承している人たちとの交流により，「農」の歴史的文化的香りに浸ることこそ「里あるき」の醍醐味となろう。

「川あるき」は，川での伝統的な漁，筏などの運搬がある。これらの発掘と復原によりそれらと人の関わり方を学ぶ。また，川を堰き止めて水田用の水をひくための堰，水田を維持するための取水用の水車も散見できる。個性的な屋根付き橋なども架かり楽しめる。ただ，河川の景観を楽しむため，川の畔を歩いて楽しむ路の整備が急がれる。

「山あるき」は，その中心が小田深山である。国有林を有してブナ林なども擁している。その中でも優れた景観を巡るトレッキングコースの創出，あるいは車椅子でも巡ることのできるバリアフリーのコースも検討する時である。また，巨木も多く，その所在と樹木物語の地図をもとに巡る。さらに，地元に宿泊したからこそ出会える時刻と場所を特定したピンポイント的な風景の紹介も積極的に行う。現地に滞在するからこそ出会える風景は，非日常的で旅ならではの感動も与えてくれる。

雨上がりの早朝，小田深山渓谷を歩く。宿泊した人にしか味わえない清冽さ

４．滞在型の模索

内子に何を求めて来町するのであろうか・・。観光振興を担当して以来ずっと考えてきていることである。伝統的な建物群は確かに精緻な技術の粋を集めて，美しい。建物を飾る意匠は，建物の美にこだわる声なき職人の魂の造形でもあろう。

また，石畳の棚田や石畳の宿周辺の農地も美しい。丹誠込めて耕し，収穫を願う人々の額に汗する作業の姿を彷彿とさせ，立ちすくむ。

川に遊ぶ子どもたちや「堰」「屋根付き橋」「水車」の顕彰やその文化の伝承に尽力されている人々の活動もまた美しい。

内子町内を周遊して滞在する，滞在型を目指すのは，前述したそのどれも「街」「里」「川」「山」に触れて，歴史的，文化的香りの中に身を浸して，心身共に健康になってもらいたいからである。

そのためには「人」が必ず介在する。人無くしては，観光交流はあり得ない。訪れる人の家族として迎える「内子人」の温かさこそ魅力といってほかならない。「内子人」は，あまねく歴史や文化を学び，郷土に誇りを持ち，足下の暮らしを大切に守り継承していく。その心根に触れようとすることで，滞在型の観光地が実現するのだろう。そのためには質の高い景観保護の精神及び実践力と説得していく忍耐強さ，それぞれの文化も受け入れる寛容さなどが求められよう。

他者と心から交流することによって，新しい情報とエネルギーは街，里，川，山に満ちあふれていくことを願っている。